

堀川恵子著『永山則夫—封印された鑑定記録』（岩波書店、2013年）

小宅 大典（元家庭裁判所調査官）



昭和43年（1968）10月から11月にかけて、わずか26日間に、22口径の拳銃で、4件の連続殺人事件を起こし、日本社会を震撼させたのが永山則夫であった。10月11日東京でホテルのガードマン射殺、10月14日 京都で民間の警備員射殺、10月26日 函館でタクシー運転手射殺、11月5日 名古屋でタクシー運転手射殺。警察庁は、4つの事件は同一犯による犯行と断定。広域重要事件とし、若い男性約17万人を対象として必死の捜査をしたが、その膨大な対象者のリストの中に永山則夫は含まれていなかった。何故捜査は難航したのか。犯人の動機が一体何かが浮かんでこない。4人の被害者に共通点がないので明らかに怨恨

ではない。4人のうち2人からわずか数千円は取っているが、物盗りでもなさそうだ。行きずりの犯行か愉快犯か、いずれもはっきりしない。迷宮入りになるのが心配されたが、半年後、急展開を迎えることになる。

昭和44年（1969）4月7日午前4時半、東京原宿駅の辺りをひどく痩せて背をかがめ、うつむいて歩いている少年を、パトカーが見つけた。警察官が職務質問をしたところ少年は素直に応じた。ポケットが膨らんでいるので調べてみたら、まだ実弾三発が装填された拳銃があった。少年は自殺しようとしていたが、手が震えて果たすことが出来なかったところを逮捕されたのであった。

「連続射殺事件の犯人 逮捕 容疑者 永山則夫 19歳」その報道はすぐに全国に伝えられ世間を安堵させた。

永山は、まだ少年であったので、警察から東京家庭裁判所に送致になった。家庭裁判所では、犯した事件の重大さから「刑事処分に付すべき」として東京地方検察庁に逆送する決定をする。そして逮捕から4ヶ月の8月8日東京地方裁判所で初公判が開かれ、長い裁判が始まった。

永山則夫は、昭和54年（1979）7月10日、東京地方裁判所で死刑判決。昭和56年（1981）8月21日、東京高等裁判所は一審を破棄し、無期懲役。2年後の昭和58年（1983）7月8日、最高裁判所は二審を破棄し、東京高等裁判所に審理をやり直すよう差し戻した。この判決は、事実上の死刑判決となった。そして平成9年（1997）死刑は執行された。

昭和48年11月28日、東京地方裁判所は、弁護団の申請により、石川義博医師による永山の第二次精神鑑定を認めた。

その前に、重鎮・新井尚賢医師による第一次精神鑑定の「新井鑑定」があった。新井鑑定は、ある程度のボリュームがあり、必要な鑑定事項をそつなくこなしていた。しかし、

永山本人が精神的に不安定で、協力してくれないせいもあったのだろうが、記載された情報の多くは家庭裁判所の記録や警察や検察の供述調書に頼っていた。しかも、永山の生い立ちの分析は、わずか数行で終わっており、「幼少期における生活環境の影響は少なくない」とだけ結論づけていた。石川医師は、この一行を看過することは出来ないと思った。永山の場合、家庭環境こそが最も大切で、解明しなければならない課題だと石川は考えた。石川は、はじめ弁護団の強い依頼要請を断っていたが、徐々に引受ける気持ちへと変わっていった。

石川医師の経歴は、東京大学医学部を卒業し、医局に入り、脳の病理学、生理学、生化学的研究をしていたが、ロンドン大学に留学。帰国後は八王子医療刑務所の医務課長を務め、犯罪精神医学や非行少年の研究に向かうようになった。

以上の記述は、2013年2月、岩波書店から発行されたフリージャーナリストで、ノンフィクション作家である堀川恵子の書いた『永山則夫』の序章を要約したものである。

石川医師は、東京地方裁判所に鑑定留置の期間を2ヶ月申請して認められ、その間、裁判は中断されることになる。新井鑑定の期間がわずか8日間であったことに比べると極めて長い。

石川医師は永山との面接に、医者がよく用いる問診ではなく、カウンセリングの手法をとろうと考えた。精神分析的カウンセリングは、医師はほとんど喋らず、患者に自由連想的に語らせ、医師はそれを聴くことに集中する。その過程で、徐々に患者は医師を信頼し、心を開いていく。永山は次第に、自分の幼年期から少年期への惨めで暗い思い出や父母や兄たちとの劣悪な関係を語り始める。石川は、永山の諒解を得て、面接全部を録音テープにとることにした。それが膨大なものになり、100時間を超えるテープとなった。そして、重大事件を起こした永山則夫の心の闇に迫っていくことになる。しかも、石川が鑑定作業にかけた期間は278日間、約9ヶ月間である。最高裁判所の統計によると、一人の医師が単独犯の鑑定を行う場合、その9割が1ヶ月以内となっており、石川鑑定の長さは極めて稀ということになる。

堀川恵子は、2000年に入って間もなく、永山則夫の事件と心の闇を、徹底的に調査し、追究してみたいと思い、当時は、個人でクリニックを経営していた石川医師に面会して録音テープの借用の承諾を得、永山を支援する団体から無数の資料も借り、また堀川自身が永山の家族や関係者と会って聴取した事実を総合的に分析して大変な苦勞をして本書をまとめた。ノンフィクションとしては349ページにわたる大作であり、力作である。そして、刑法、刑事訴訟法、少年法の法律面からも、犯罪精神医学、犯罪社会学、犯罪心理学、臨床心理学、家族社会学等の学問に関心をもち、勉強している学徒にとっても参考となる書物であり、また、割とやさしく、物語風に書かれているところが多いので、一般の方々にもお勧めしたい本でもある。

永山の両親は、昭和5年(1930)青森県北津軽郡板柳町で結婚した。永山則夫の父はりんご試験場の技師で、頭がよく、技術にすぐれ、町の人々から「技師さま」と尊敬されていた。しかし、一つの問題があった。父は無類の博打好きであった。博打は独身の時からで、母の親族は結婚には猛反対であったが、二人は恋愛結婚してしまう。結婚当初、父は稼ぎを家に入れていたが、やがて右から左へと博打に注ぎ込むようになり、借金が増えて

いった。そして、親から受け継いだ家屋敷さえ借金のかたにとられることになる。町の評判もわるくなり、夫婦は世間から孤立してしまった。そんな八方塞の中で、父に北海道網走からの誘いの声がかかる。網走では、当時優秀なりんご技師を求めているのである。夫婦と子ども3人の一家5人は網走に行くことになる。

昭和11年(1936)に網走に行ってから数年は、父は一転してまじめに働くようになり、家庭が安定し、三女、二男、三男が生まれ、子どもが6人にふえた。長女は優秀で、やさしい娘で、家事をよくやっていたし、長男も二男も学校の成績がよかった。しかし、一家の幸せはそれほど長くは続かなかった。

昭和16年(1941)日本は太平洋戦争に突入し、父は、間もなく横須賀海兵団に招集され、3年後、敗戦となり網走に帰ってきた。父は、今まで飲まなかった酒をひどく飲むようになっており、再び博打にのめり込んでいく。

当然夫婦仲も悪くなる。父はブラブラして仕事をしないので、母が代わって行商に出るようになった。母代理の長女が家事と育児を懸命にしていると、父は長女を殴ってまで金を持っていくようになる。そんな最中の昭和24年(1949)年四男・則夫が生れ、その3年後に四女が生れる。家計は、ますます困窮し、破綻していった。

永山家は4男4女のほか長男が同級生に生ませた女の子を入れると子どもが9人になった。それなのに、父は依然として家に帰らず放蕩を続けていた。長男は就職して、家を出ていた。やさしく弟や妹の面倒をよく見て家事全般をこなしていた長女は、心労から精神病になり入院した。則夫が生れた時から母親代りに大事にしてくれていた長女の発病は、則夫の人格形成に大きな影響を与えることとなる。

昭和28年(1953)10月、母は、実家のある板柳町に四女(1歳)と長男の子である孫(1歳)と2人の子どもの面倒を見るために選ばれた二女(17歳)を連れて帰ってきた。三女、二男、三男、四男・則夫(4歳)の4人の子どもは、寒い冬、網走の家に残されたのである。母は、その時、それ以外に家族が生き残る方法はないと判断したのである。残された4人の詳細については、はっきりしないが、乞食同然であったと思われるし、二男と三男は、空腹の腹いせに、幼い弟・則夫を殴ったり、蹴ったりしていじめていたことが想像される。

翌年春、福祉事務所の職員が、板柳町の母と連絡をとり、旅費を出してやり、4人の子どもは板柳町に来ることになる。

4人の子どもが板柳町に来てから、二女も三女も家から出て行き、家には二男(11歳)、三男(9歳)、四男・則夫(4歳)そして四女と孫(ともに2歳)となった。家族6人が暮らしたのは、板柳駅から歩いてすぐの場所にある「マーケット」と呼ばれる棟割り長屋であった。

板柳町でも一家の窮状は、網走の時とあまり変わりはない。母は毎日行商に出て行って夜遅く帰り、子どもらの面倒はほとんど見ていなかった。年上の二男が権勢を振り、則夫はよく殴られていた。そんな中で、則夫は小学校と中学校を卒業する。頭は悪くなく、勉強すればよく出来る子であったが、欠席ばかりで不登校が続いていた。中学校に進学しても不登校が続いたが、家計を援助するために、毎朝新聞配達をはじめた。月給はわずかなものであったが、則夫にとって貴重な収入源になる。そして目立った非行もなかった。

板柳町の生活について、永山は刑務所に入ってから『木橋』という自伝小説を書いた。

それが社会的反響を呼び、後に新日本文学賞を受賞している。N少年というのは永山自身であり、木橋というのは、永山一家の住んでいた「マーケット」という長屋のすぐ近くを流れていた岩木川にかかっていた橋が、当時木の橋であったからである。

昭和40年（1965）3月下旬、500人もの生徒を詰め込んだ集団就職の列車に永山則夫も乗って上京した。右肩上がりの高度経済成長の時代で、中学卒業生は、「金の卵」と持てはやされていた。上京して、連続ピストル殺人事件を起こすまでの3年半の時間の流れは、永山則夫という人間を理解するのに極めて重要であることは言うまでもない。

上京してから、永山は転々と仕事を変えている。就職すると懸命に働き、仕事もすぐに覚えるが、職場で人間関係が作れず、すぐに孤立してしまい辞めてしまう。その頃、長男、二男、三男も東京に来て働いていたが、則夫が訪ねていっても、親身になって相談に乗ったり、援助したりするようなことは、ほとんどなかった。彼は、大都会の片隅で、ますます金に困り、精神的にも追い詰められていく。

私は家庭裁判所調査官として、昭和37年（1962）から48年（1973）まで、青森家庭裁判所弘前支部で、主として少年事件を担当していた。少年人口が急増し、少年事件も激増し、仕事に追われていた。そんな時、永山則夫の重大事件が起き、そのショックで眠れない夜があったことを今思い出す。そんな訳で、堀川恵子著『永山則夫』は、ここ数年間で最も感銘を受けた本となった。本当に素晴らしいノンフィクション作品である。

この本の副題に「封印された鑑定記録」とある。永山事件の一連の流れの中で、石川鑑定に対する評価がまったく異なっていた。一審では「死刑」、二審では「無期懲役」と裁判所の判断は分かれている。にもかかわらず、事実上の死刑判決を下した三審（最高裁判所第一次上告審）の差し戻しの判決文は、石川鑑定について一言も触れていないことに、堀川恵子は疑問を投げ掛けている。

これだけの重大事件だから、結果的に、死刑判決はやむを得なかったのかもしれないが、石川医師が調べ上げた永山家の劣悪な家庭環境と、このように崩壊している家庭に援助の手を差し伸べることの出来なかった周囲の社会状況に対しても、判決文は言及してもらいたかったと著者・堀川は指摘している。

このノンフィクションには、永山則夫を巡る多くの人物が登場しているし、時間的にもいろいろな出来事が前後して出てきたり、複雑に絡まったりしているので、分かりづらいところがある。最後に、生活歴と事件の流れ等を簡単にでも時系列にして表にしてくれれば、読者にとって有り難いと思った。